

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：32643

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K13483

研究課題名（和文）神経発達症をもつ子の両親システムへの介入研究：マルトリートメントの援助にむけて

研究課題名（英文）Intervention study on improving the relational system for the parents/spouses who have adolescents with neurodevelopmental challenges to prevent maltreatment.

研究代表者

稲垣 綾子（Ayako, Inagaki）

帝京大学・文学部・講師

研究者番号：70823178

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：青年期の子どもをもつ両親を対象にした、アタッチメントベースドプログラムの介入研究として、単一夫婦事例を通じたプロトコル開発研究、3組の複数夫婦事例を通じたセラピストマニュアル開発研究を実施した。事前事後調査の結果、すべての事例で神経発達症や不登校の課題を抱える子どもの対応に苦慮する両親が、青年期の発達課題に対し、親としてどのように後方支援をしていくとよいか、という視点をアタッチメントの観点から考える機会を得ていた。また、子どもに対する視点転換と対応の方向性を見直していく様子がみられ、最後のセッションでは具体的な子育ての取り決めを策定することができ、両親夫婦のパートナーシップの高まりがみられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

セッション中の会話・シークエンス分析の結果からは、夫婦のアタッチメントニーズを検討する際には、それぞれのニーズの発信スタイルを共有し、チームとしてどのように解決していくとよいかといったパートナーシップを高めていく方略を含めることが重要である（Inagaki, 2023; 稲垣, 2023）。これは構造化された短期セラピーセッション、そして、トラウマに配慮したアプローチという観点からも有用である。夫婦が家族全体のアタッチメントニーズを考え、親・夫婦として共有していく具体的な取り決めとしての「子育て協定」に結実していく可能性などが示唆され、両親夫婦システムの介入の視点を提起した。

研究成果の概要（英文）：I conducted two intervention studies with the purpose of developing an attachment-based program for couples who have adolescents with neuro-developmental challenges. The purpose of the first study was to develop the protocols of the program, which consisted of 9 sessions, through a single-case study. The aim of the second study was to develop the manual for therapists, with the participation of four couples. As a result of pre-post research, all cases had improved the parental view on their adolescents to consider their attachment needs behind their problems and behaviors. The parents did not focus so much on the adolescents' challenges and problems but considered how they should relate and provide the necessary support for their adolescents to get over. At the end of the program, all cases were able to spontaneously create specific agreements on parenting for the whole family unit, which led to the strengthening of the partnership between the spouses.

研究分野：家族臨床心理学

キーワード：アタッチメントベースドプログラム アタッチメントニーズ 夫婦両親 青年期 家族療法 神経発達症 不登校

1. 研究開始当初の背景

神経発達症をもつ子どもへのマルチリートメントが生じやすい背景に、類似した特性をもつ家族性や受容の問題がある。親子間の自他境界は曖昧になり、行動と感情を切り分ける作業が困難となるため、研究代表者は個別に発達特性の理解を深める心理教育と家族機能を高めるプログラムを、両親を対象に実施してきた。これはアタッチメントの観点から子の行動を捉え、両親それぞれの子に対する感情、養育に関するビリーフ、その経緯や文脈を話し合い、子との相互影響関係を両親システムにて検討していく家族療法をベースにしたプログラムである。本研究では、両親のもつ感情・ビリーフ・文脈を質的に明らかにするとともに、プロトコルを作成、実施し、効果検証を行う。

2. 研究の目的

青年期のメンタルヘルス不調が成人期以降まで長引く現象は国内外でみられ、実効性ある援助アプローチが火急に求められている。青年期の身体心理社会的な発達プロセスは複雑であるが、危機時に発動されるアタッチメントシステムは他者との相互作用の中でしなやかに柔軟に変化する特徴をもつ。そのため、親や周囲の大人が青年の言動の背後にあるアタッチメントニーズをセンシティブにキャッチし、応答していく好循環の相互作用を作り出していくことが重要となる。これは神経発達症をもつ青年のアイデンティティ発達を支える関係システムになりうるものである(稲垣, 2022)。本研究では青年期の子どもに対する養育システムへの支援方策の実装を目指し、両親を対象とした青年と家族のアタッチメントプログラムの開発を目的とする。

3. 研究の方法

アタッチメント理論に基づく心理教育プログラムの理論的背景を整理し、全9セッションからなるプログラムを作成した。プログラムのねらいは、以下の4つである。

- ①神経発達症を健康や自己発達という巨視的な視点からも捉え直し、成人期以降の人生に向かう青年期という移行期の複雑さとそれを支える親の役割を身につける
- ②青年期の子どもに親がアタッチメント対象として自律性を促していく視点を身につけ、アタッチメントの利用可能性の脅威が高まらないように、両親間で子育て協定を結んでいく
- ③子育て協定を結ぶために、両親間の成人アタッチメントの機能を高めていく
- ④子ども・家族にとっての安全の基地と避難所(Secure base & Safe haven)を両親がどうしつらえていくかを考えていく機会とする

このプログラム開発に向け、二つの研究を行った。

第一研究は、作成したプログラムのプロトコル開発を目的としたシングルケース研究であった。第二研究は、第一研究を経て精緻化したプロトコルによる、セラピストマニュアル開発研究であった。第一研究は1組の夫婦、第二研究には3組の夫婦が参加した。いずれも、プログラムの前後には、事前事後調査を実施した。

両研究ともに、研究代表者が所属する倫理審査の承認を受け、研究を実施した。

4. 研究成果

第一研究では、単一事例を対象にプログラムを実施し、プロトコル開発の精緻化を図った。トラウマインフォームドの観点からは、現在の夫婦のアタッチメントニーズについて検討するセッションの重要性は大きく、青年のアタッチメントニーズについてディスカッションする際にもこの検討が体験的な理解として役立つ、両親の話し合いを深める可能性が示唆された。多世代的な文脈、ビリーフ、感情を共有するセッションについて見直し、プログラムならびにプロトコル内容の改良を進めた。

加えて、安全に本プログラムを実施する基盤を固めるため、両親とのセッションを進める上で必要となるセラピストの知識・技能・姿勢・見立てと介入のあり方についても検討し、マニュアルを改良・策定する必要性から、第二研究を実施した。

事前事後調査の結果、第一・第二研究に参加したすべての事例で、神経発達症や不登校等の課題を抱える青年期の子どもへの対応に苦慮している両親が、青年期にふりかかるさまざまな発達課題に対し、親としてどのように後方支援をしていくとよいか、という視点をアタッチメントの観点から考える機会を得ていた。それに伴い、青年期の子どもに対する視点転換と対応の方向性を見直していく様子が見られた。

また、セッション中の会話・シーケンス分析の結果からは、夫婦のアタッチメントニーズを検討するには、それぞれのニーズの発信スタイルを共有し、チームとしてどのように解決していくとよいのかといったパートナーシップを高めていく方略を含めることが重要であると考えられた (Inagaki, 2023; 稲垣, 2023)。これは構造化された短期セラピーセッション、そして、トラウマに配慮したアプローチという観点からも有用である。以上により、夫婦が家族全体のアタッチメントニーズを考え、親として夫婦として共有していく具体的な取り決めとしての「子育て協定」へ結実していく可能性が示唆された。

事前事後調査からは、子育て期の親が両親そろってセッションに参加することの意義は大きい、現実的な制約もあることや、単身親にも提供していくための工夫が検討点として挙げられた。単身親の参加だけでも家族全体のアタッチメントニーズを検討していくことができるためのプロトコルが、支援の裾野を広げるためにも必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Ayako Inagaki	4. 巻 2
2. 論文標題 Listening to and Sharing Concerns with One's Spouse: Co-constructed Narratives and Sociocultural Discourses in Japanese Marital Communication	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Asian Qualitative Inquiry Association	6. 最初と最後の頁 27~40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.56428/aqij.2023.2.1.27	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 稲垣綾子	4. 巻 27
2. 論文標題 こころにおける危機とニーズへの参入を考える	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 帝京大学心理学紀要	6. 最初と最後の頁 46-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 稲垣綾子	4. 巻 39
2. 論文標題 知的発達症と自閉スペクトラム症をもつ本人と家族の“自立と自律”をめぐる支援：親子・両親間のアタッチメントニーズに着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 家族療法研究	6. 最初と最後の頁 55-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Ayako Inagaki
2. 発表標題 Pilot study of the Attachment based program for Parents with adolescence as a family unit in Japan in order to “Make an Agreement on Parenting; MAP”
3. 学会等名 International Attachment Conference
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 稲垣綾子
2. 発表標題 夫婦のアタッチメントニーズに関する共同生成ナラティブと社会文化的ディスコース
3. 学会等名 日本質的心理学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 稲垣綾子
2. 発表標題 両親を対象とした青年と家族のアタッチメント・プログラムのプロトコル開発の試み
3. 学会等名 日本家族心理学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
カナダ	Adolescent Health lab	Simon Fraser University	